

第六章　流動資本と固定資本

一

資本についての説明を完結させるために、資本が通常二種類に分けられることについて、いくつか述べておく必要がある。この区別はきわめて明白で、呼び名こそ付けていないものの、前二章でもしばしば言及してきた。そこでここでは、その区別をあらためて正確に定義し、それから生じるいくつかの結果を示すことにする。

どの商品の生産に投じられる資本でも、そのうちの一部は、いつたん使用されると、その時点で資本としては存在しなくなり、生産に役立つ能力を失うか、少なくとも同じ役割を、同じ種類の生産に対しても果たせなくなる。代表的なのは原材料から成る部分で、たとえば石けんの原料である獸脂やアルカリは、製造に用いられた時点で獸脂やアルカリとしては失われ、同じ形のまま石けん作りに再び用いることはできないが、形を変えてしまふとなつた後なら、ほかの生産部門で材料や道具として用いられることはありう

る。同じ区分に入るのが、賃金として支払われる資本、すなわち労働者の生活手段として消費される部分である。綿紡績業者が労働者に支払った資本のうち、支払われた部分はその時点では業者の資本、ひいては綿紡績業者の資本としてはもはや存在しないし、労働者が消費した分は資本としてまったく残らない。労働者がその一部を貯蓄したとしても、それは二度目の蓄積によって生まれた新たな資本とみるのがより適切である。このように、単一の使用によって、その投じられた生産における役割をすべて果たし切る資本を流動資本という。この名称はあまり適切ではないが、完成品の販売によって絶えず補われ、補われたそばから原材料の購入や賃金の支払いとして絶えず手放され、手元にとどまつて働くのではなく、持ち手が移ることで機能する、という事情に由来する。

ただし、資本のもう一つの大きな部分は、比較的恒久的な性質をもつ生産手段から成り、それは手放すことによってではなく、保有したまま繰り返し使用することによって効果を生み、その効用は一回の使用で尽きない。この部類には、建物や機械、道具や工具と呼ばれるものの全部または大半が属する。これらのうちには耐久性の高いものも多く、生産作業の反復を通じて、生産手段としての役割が長く続く。同じ部類には、土地の恒久的な改良に投じた、いわゆる埋没資本も含まれる。また、事業の開始にあたり、

3 第六章 流動資本と固定資本

後の作業のための道を整える目的で一度きり支出される資本もこれに含まれ、例えば鉱山の開坑費、運河の開削費、道路やドックの整備費などがそうである。ほかにも例は挙げられるが、以上で十分である。このように、耐久的な形で存在し、その回収が対応する期間にわたって分散する資本を固定資本という。

固定資本のなかには、種類によって、必要に応じて、または一定の周期で更新が必要になるものがある。道具や建物は、一定の間隔で修繕しつつ部分的に取り替えながら使われるが、やがて完全に摩耗して役目を終え、最後は材料として扱われる。これに対して、異常な事故がないかぎり全面的な更新を要しない固定資本であっても、その状態を維持するための支出は、定期的であれ不定期であれ避けられない。ドックや運河は、いつたん造れば、意図的な破壊や地震などの大災害で埋まらないかぎり造り直しは不要だが、修理のための支出は継続的に、しかも頻繁に必要になる。鉱山も開坑費は一度で済むものの、排水などに費用を投じて維持しなければ、まもなく利用できなくなる。固定資本で最も恒久性が高いのは、土地のような自然の働きに生産力の増加を与えるために行う改良である。ベッドフォード低地のような湿地や浸水地の排水、海からの干拓、堤防による保全は恒久性を前提とするが、排水路や堤は修繕を頻繁に要する。粘土質の土

壤の生産力を大きく高める心土排水や、いわゆる永続肥料として、植物の成分となつて消費される物質ではなく、土壤と空気、水の関係を変える物質を加える改良も同様で、重い土には砂や石灰を、軽い土には粘土や泥灰を加える方法が挙げられる。ただし、こうした工事も、効果を十分に保つには、ごく少額でもときどき支出が必要になる。

これらの改良は、改良と呼ぶに値する以上、収穫を増やし、維持に必要な費用を差し引いてもなお余剰を残す。その余剰は当初に投下した資本の収益となり、その収益は機械の場合のように摩耗とともに途切れるのではなく、永続する。こうして生産力が高まつた土地は、その增加分に比例する市場価値を持つため、改良に投じた資本は土地の値上がりの中にいまも存在していると考えられがちである。しかし誤解してはならない。

資本はほかの資本と同じく、すでに消費されている。それは改良を行つた労働者の生活費と、作業を助けた道具の損耗によって消費されたのである。ただし、その消費は生産的であり、私有された自然的要素である土地の生産力を高めるという恒久的な結果を残した。増加した产出は、土地と土地に固定された資本との共同の成果と呼ぶこともできる。しかしその資本は実際には消費されて引き揚げられないため、その生産力は以後、土壤本来の性質から生じる生産力と不可分に一体化し、その使用に対する報酬は、労働

や資本の収益を左右する法則ではなく、自然的要素への報酬を左右する法則に従う。その内容は後で述べる。

二

国全体の生産総額への影響は、流動資本と固定資本とで大きく異なる。流動資本は一度使えばその性質として失われ、最終的に所有者の手元に残らないため、所有者が資本を補填し、その生産的使用に対する報酬を得る唯一の源泉は、その一回の使用によって生まれた生産物に限られる。したがって、生産物は、投じた流動資本の全額を再生産したうえで、さらに利潤を上乗せできるだけの価値を持たなければならない。これに対し固定資本には、同じ条件は求められない。たとえば機械は一回の使用で完全に消費されるものではないので、そのつどの生産物で全額をただちに補填する必要はない。機械は、各期間ごとに修理費とその期間に生じた価値の減耗をまかない、さらに機械の全価に対する通常の利潤を得られるだけの余剰をもたらすなら、所有者の目的にかなう。

流動資本を減らして固定資本を増やすことは、少なくとも当面のあいだ、労働者の利

害に不利に働きやすい。これは機械化にかぎらず、資本を土地改良などに固定し、労働者の維持や賃金の支払いに回せる資金を恒久的に減らすような改善全般に当てはまる。たとえば、自作農が穀物二、〇〇〇クオーテーを資本として労働者を一年養い、毎年二、四〇〇クオーテーを得て利益率が二〇パーセントであり、その利益を毎年消費しながら、元手の二、〇〇〇クオーテーを回して経営を続いているとする。ここで資本の半分を投じて土地に恒久的な改良を施し、労働者の半数が一年かけてその工事に従事した結果、翌年以降は耕作に必要な労働者が従来の半分で足りるようになつたと仮定する。初年度は、労働者の状態に差はなく、ただ一部の労働者が、これまでの耕作の仕事の代わりに土地改良の工事をして同じ賃金を受け取るだけである。しかし一年後には、通常どおりの生産によって再生産される流動資本は一、〇〇〇クオーテーにとどまり、彼の手元にあるのはその一、〇〇〇クオーテーと改良された土地だけになる。翌年以降、彼が雇う労働者は半分になり、労働者に分配される生活資料も従来の半分になる。改良後も、労働が減つたままで収穫が二、四〇〇クオーテーのままなら利潤は大きく、改良による増益の一部を貯蓄して資本を積み増し、雇用を拡大して労働者の損失がほどなく埋まる可能性はある。だが、改良がほぼ恒久で維持費も軽い場合には、収穫が二、四〇〇クオーテー

ターではなく一、五〇〇クオーターに下がつても、流動資本一、〇〇〇クオーターを補填でき、固定資本と流動資本を合わせた総資本に対する利益率は二五パーセントと、従来の二〇パーセントを上回るため、改良者はなお大きく得をする。したがつて、改良が本人には高収益でも、労働者には大きな不利益となり得る。

この仮定は、述べられたとおりではあまりに理念的で、当てはまるとしても耕地を牧草地に転換する場合などに限られる。こうした転換は以前はしばしば行われたが、一八四九年当時の近代的な農業者はそれを改良ではなく、むしろその逆だとみなしていた。とはいっても議論の要点は変わらない。改良によって必要な労働量が減らず、同じ労働で産出だけが増え、その増産分にも需要があつて確実に売れるとき仮定するなら、改良者は従来どおり同じ人数を同じ賃金で雇い続けなければならない。だが、その賃金を支払う手段はどこから得るのか。賃金支払いに充てられた当初の資本二、〇〇〇クオーターを、彼はもはや自由に使えない。一、〇〇〇クオーターは改良のために費やされ、失われてしまつたからである。以前と同じ雇用条件を維持するには一、〇〇〇クオーターが不足し、借り入れなどで補うほかなくなる。しかも、その一、〇〇〇クオーターはもともと同量の労働を支えていた、あるいは支える予定だったものであつて、新たに生み出され

たものではなく、使い道が一つの生産的雇用から別の生産的雇用へ移つたにすぎない。

したがつて、その農業者が自分の流動資本の不足を埋め合わせても、社会全体の流動資本に生じた欠損は埋まらず、そのまま残る。

機械は労働者階級に害を与えるないと考える人びとの多くは、機械によって生産費が下がれば価格も下がり、その結果として需要が増えて生産が拡大し、やがてその生産に従事する人数も以前より増えるのだと主張する。しかし、この説明が世間で言われるほど決定的な重みをもつとは言い切れない。大づかみに言えば、たしかに当てはまる例もあり、印刷術の登場で写字係は職を失つたものの、まもなく植字工や印刷工の数がそれを上回り、綿工業でもハーゲリーブズやアーフライトの発明以前に比べて労働者が数倍に増え、巨額の固定資本が投じられただけでなく、過去のどの時期にも増して多くの流動資本が同時に用いられていることがうかがえる。けれども、その資本が別の産業やほかの雇用から引き抜かれてきたものなら事情は変わり、高価な機械に沈んだ資本の代わりに用いられた資金が、改良によつて新たに生まれた貯蓄ではなく、社会全体の一般資本からの取り崩しにすぎないのでとすれば、その単なる移し替えによつて労働者階級にどれほどの利益があつたのかは疑わしい。さらに、流動資本が固定資本に置き換わつて生

じた損失は、残つた流動資本の一部を従来の用途から別の用途へ回しただけで、本当に埋め合わせられるのかという問題が残る。

労働者階級が集団として、機械の導入や恒久的な改良への投資によつて一時的に不利益を受けないという見方は誤りであり、変化が及ぶ産業部門で損失が生じることは、一般的の常識に照らしても明らかである。それでも、ある部門で雇用が失われても別の部門でちょうど同量の雇用が生まれる、あるいは特定の商品が値下がりすれば消費者が節約した分をほかの商品に回し、別の種類の労働への需要が増える、という説明がしばしば述べられるが、そこには誤解がある。商品への需要と労働への需要は同じではなく、支出の余力が生まれただけでは生産は増えず、増産には資本が必要であるうえ、改良によって資本が解放されていないどころか、むしろほかの用途から資本を吸収している場合さえある。したがつて、別部門で生産と雇用が増えるという想定は成り立たず、一部の消費者の需要増は、改良によつて職を失つた労働者の側の需要減、すなわち需要の停止によつて相殺される。その労働者が生活を維持できたとしても、それは競争や慈善を通じて、従来は他者が消費していた分を分け合うにとどまる。

三

取引の実態から見れば、生産の改良が労働者階級全体に、たとえ一時的であっても害を及ぼすことは、ほとんどないと思われる。害が生じるとすれば、改良が突然かつ大規模に行われ、多くの沈下資本をまかなうための資金を、すでに流動資本として用いられている資金から必然的に調達せざるを得ない場合である。しかし改良はつねにきわめて段階的に導入され、流動資本を実際の生産から引き上げてまで行わることは、ほとんどなく、年ごとの増加分を充てて行われる。流動資本が急速に増えていない時期や場所で、固定資本だけが大きく増えた例は、ほとんど見当たらない。多額の費用を伴う生産改良は、貧しい国や立ち遅れた国では起っこりにくい。土地に資本を投じて恒久的な収益を得ることや、高価な機械を導入することは、目先の犠牲を払つて将来の目的をねらう行為であり、第一に財産の安全がかなり確立していること、第二に産業上の企業活動が活発であること、第三に「蓄積への有効な欲求」の水準が高いことを示す。そしてこれら三つはいずれも、資本量が急速に増える社会の要素である。したがつて労働者階級が苦しむことになるのは、固定資本の増加が流動資本を圧迫する場合だけでなく、その増

加が過度に大きくなりで、人口増に見合つて続いてきた通常の資本増加のテンポを鈍らせる場合にもあり得る。しかし実際にそうなる可能性はきわめて低い。固定資本が流動資本に比して過度の割合で増え続ける国は、おそらくないからである。仮に一八四五年の投機熱のさなか、議会が認可した鉄道がすべて、各路線に定められた完成期限どおりに建設されていたなら、この起こりにくく事態が現実になつた可能性は高い。だがこの事例そのものが、従来の用途に向けられていた資本の相当部分を新たな用途へ振り向けることが、いかに難しいかを鮮やかに示した。一般に、この難しさは、沈下資本を伴う事業が既存の労働需要の源を損なうほどの速さで広がるのを防ぐのに、十分な大きさを持っている。

改良は、当面は社会全体の総生産や流通資本を減らすことがあつても、長期的にはその両方を増やす傾向がある。改良によつて資本の収益率が高まれば、その増加分の利益は、資本家には利潤の増加として、または消費者には価格の低下として、必ずいざれかの形で現れる。その結果、蓄積に回せる資金の原資が増え、利潤が増えるほど蓄積しようとする意欲も強まる。たとえば、改良の直後に総生産が二、四〇〇クオーターから一、五〇〇クオーターに減つたとしても、資本家の利潤は四〇〇クオーターから五〇〇クオ

ーターに増えたのだから、増加分の一〇〇クオーターを継続して貯蓄すれば、数年で流通資本から差し引かれた一、〇〇〇クオーターを埋め合わせられる計算になる。さらに、改良が行われた部門では、その後に事業拡大がほぼ確実に起こり、その部門に携わる者にとって資本を積み増す強い動機となる。改良はふつうゆっくり導入されるため、最終的に改良が吸収する資本の多くは、改良によって生じた利潤の増加と貯蓄の増加によつてまかなわれる。

生産技術の改良は資本の蓄積を促し、その結果として総生産を最終的に押し上げる方向に働く。この傾向は、改良の過程で総生産が一時的に減少することがあっても変わらない。むしろ、資本の蓄積にも土地からの増産にも、それぞれ到達しうる限界があり、ひとたびその限界に達すればそれ以上の増加は止まるのに対して、改良はこれらの限界の一方または双方をさらに先へ押しやると見込まれるぶん、いつそう明らかになる。こうした点はのちの検討でさらに明確になるが、要するに、各国で蓄積される、または蓄積しうる資本の量と、生み出しうる総生産の量は、その国の生産技術の水準に比例し、どのような改良も当面は流動資本や総生産を減らしうる一方で、長期的には、改良がなければ不可能だった規模まで両者が拡大する余地をつくる。これは機械導入への反対論

に対する決定的な反論であり、機械による発明が現行の社会のもとでも労働者に最終的な利益をもたらすという根拠も、のちに確かな形で示される。ただし政府は、その最終的利益が現在生きる世代に害を及ぼしうる以上、その害を和らげ、できる限り未然に防ぐ責務を負う。機械の導入や有用な公共事業への投資によって資本の固定化が進み、労働者の生活を支える資金を実質的に損なうほどの速度で進むなら、立法者はその進行を抑える措置を講じるべきである。さらに、全体として雇用を減らさない改良であっても多くの場合、特定の労働者層を職から押し出すのだから、同時代の人びとや将来世代の利益のために犠牲を強いられる人びとの利害ほど、立法者が正当に配慮すべき対象はない。

固定資本と流動資本の理論上の区別に立ち返ると、再生産に回される予定の富はすべて資本とみなされるため、資本の中にはそのいずれの定義にも当てはまりにくい部分が出てくる。たとえば、製造業者や商人が倉庫に保管している未販売の完成品の在庫は、用途の上では資本だとしても、まだ生産に用いられておらず、実際に働いている資本とは言いにくい。それは売却または交換によって、ほかの商品と等価な価値に転化してはじめて資本として実際に働き始めるので、この段階ではまだ固定資本でも流動資本でも

ないが、のちにいざれかとなり、最終的には両方に分かれていく。完成品が売れれば、製造業者は代金の一部を労働者への賃金に充て、別の一部で原材料の在庫を補い、残りを新しい建物や機械の購入、または既存設備の修繕に回すことになるが、その配分は業種の性格と当面の事情によって左右される。

種子や原材料として使われる資本は、固定資本とは違つて総生産物からすぐには補われなければならないが、労働を雇用する点では固定資本と同じ関係にある。つまり、材料に充てる資金は機械に固定する資金と同様に、労働者の維持や賃金の支払いに充てられる資本から差し引かれるため、これまで賃金に充てられていた資本が材料の購入に転用されれば、固定資本が増えた場合と同じように労働者に不利に働く。ただし、この種の資本の転用は、起こるとしてもほとんどない。というのも、生産の改善は、一定の生産物を得るために必要な種子や原材料の支出を節約する方向に進むのが通常で、増やす方向には進みにくいからであり、この点について労働者が不利益を心配する必要はない。